福島県教育庁相双教育事務所　総務社会教育課

R8 社会教育 REPORT 09



〒975-0031
福島県南相馬市原町区錦町一丁目 30 番地
TEL:(0244)26-1315
FAX:(0244)26-1318
E-mail:sousou.kyouiku@pref.fukushima.lg.jp

川内村公民館訪問・社会教育研修（7/17）

課題　「これからの公民館、地域づくりについて」

本会議では、川内村を中心とした各市町村の生涯学習・公民館活動の現状と課題について共有が行われた。

まず、川内村からは人口増加施策や教育環境の整備状況について説明があった。令和 8 年度の児童生徒数は 92 名で、義務教育学校の運営とともに、放課後児童クラブや地域交流機能を備えた施設の「にじいろ」を活用し、住民と子どもが一体となって学べる環境づくりが進められている。

また、公民館機能については、旧中学校施設の活用や新庁舎へのコミュニティスペース整備を検討しており、今後の地域交流拠点の充実が課題として挙げられた。

生涯学習事業では、成人式、花いっぱい運動、文化財保護、スポーツ振興、地域イベントなど多岐にわたる事業を少人数体制で実施している現状が報告された。

一方で、文化団体の高齢化や活動休止など、地域活動の縮小も課題となっている。

実践例　人口減少・高齢化に伴う参加者確保の取り組み　Good!

【南相馬市】　人口減少により若年層の参加が難しくなっており、土日開催や夜間講座、スマートフォンによる申込など、参加しやすい仕組みづくりを進めている。また、動画配信など新しい学習形態も導入している。

【大熊町】　帰還後のまちづくりの中で、公民館機能が未整備であるため、学校施設を活用した講座や高齢者大学、地域交流活動を実施している。今後は複合施設としての公民館整備が予定されている。

【相馬市】　公民館主催の企画講座を充実させることで、住民主体の「自主教室」へ発展させる取り組みを行っている。また、学習成果を地域に還元する活動（福祉施設訪問や発表活動）を通じて、参加意欲の向上につなげている。

【全体として、共通の課題】
①人口減少・高齢化による参加者の減少
②若年層の参加促進の難しさ
③事業の担い手不足
④コミュニティの希薄化





【方向性】
※土日・夜間開催など柔軟な講座運営
※オンライン配信との併用（ハイブリッド型）
※学校・地域との連携強化
※成果発表や社会貢献による参加意欲の向上

【地域に新たなつながりや活力を生み出していく拠点】

公民館は今後、「第 3 の居場所」「地域防災の拠点」「対話と実践の場」として、これまで以上に重要な役割を担うことが改めて認識された。人口減少社会においては、単なる講座提供の場にとどまるのではなく、人と人とのつながりを育み、地域の活力を再生・創出する中核的な拠点として、その機能の一層の充実と強化が求められていることを確認した。

令和８年７月２２日　発行

演題

～ 復興に向けた学びを通じた協働のまちづくり事業 ～

「震災復興、まちづくりの第一歩」

震災の語りから学ぶ防災教育の本質　〈自助意識を育てる社会教育の役割〉

本講演では、いわき語り部の会会長である大谷慶一氏を講師に迎え、東日本大震災の体験に基づく防災と、まちづくりについて学んだ。

大谷氏は、福島県沿岸部において発生した津波被害の実情を、自身の体験を交えながら語った。震災当時、同地域は約 340 世帯 780 人が暮らしていたが、津波によりほぼ壊滅状態となり、建物の大半が流失・倒壊した。現在は復興が進み約 270 世帯まで回復しているものの、その多くは移住者であり、地域の構成は大きく変化している。

講演では、震災時の具体的な行動と判断についても言及された。地震発生後、講師は津波警報をラジオで確認しながらも、「これまでと同程度だろう」という思い込みから避難の判断が遅れたという。しかし実際には、予想をはるかに超える津波が襲来し、町は一瞬にして壊滅した。

特に印象的であったのは、「なぜ多くの命が失われたのか」という問いに対する講師の指摘である。講師は、被害の原因は行政や外的要因だけではなく、「自分は大丈夫だろう」という個々人の心の油断にあったと述べた。この指摘は、災害に対する主体的な備えの重要性を強く示している。

また、避難行動における判断の難しさについても具体的な事例が紹介された。講師は、避難途中に高齢者や子どもと遭遇し、助けるか自分が逃げるかという瞬時の判断を迫られた経験を語った。その中で、すべての命を救うことはできなかったという現実と、その記憶が今も消えることなく残っていることが伝えられた。

さらに、学校における避難の在り方についても重要な示唆があった。災害時には保護者による引き取りが行われることが多いが、講師は「学校は安全な場所であり、むしろ子どもを留めるべき場合もある」と指摘し、現場判断の重要性を強調した。

本講演から得られる最大の学びは、「自分の命は自分で守る」という自助の意識である。講師は、日常生活の中で「今この瞬間に災害が起きたらどう行動するか」を想像するイメージトレーニングの重要性を提案した。これは特別な準備を必要とせず、誰でも実践できる防災教育の一つである。

社会教育の観点から見ると、この講演は単なる知識伝達ではなく、受講者一人ひとりの意識変容を促すものであった。災害の教訓を個人の問題として捉え直し、それを他者へ伝えていくことが、地域全体の防災力向上につながると考えられる。

今後の社会教育においては、このような実体験に基づく学びを通して、自助・共助の意識を育てる取り組みが一層重要になるといえる。

災害を教訓に、地域全体の防災力向上につなげる

（注意） 思い込みから避難の判断が遅れた。

●自分は大丈夫だろうという心の油断があった。

●そのとき、その場の瞬時の判断が求められる。

（注目） 「学校は安全な場所であり、むしろ子どもを留めるべき場合もある！」

防災教育

〇確かな情報の収集ができる。

〇大人の目、判断によって、最善の対応ができる。





相馬市から１名、南相馬市から３名、浪江町から１名参加していただきできました。ありがとうございました。